大賞・優秀賞

設計担当者

西口 賢

愛知建築士会、西口賢 建築設計事務所

戸建住宅／愛知県岡崎市

大地の家

構造	木造
階数	地上2階
敷地面積	225.97㎡
建築面積	108.50㎡
延べ面積	93.94㎡
竣工	平成30年12月3日

1

2

3

1 南側道路から見る。「半内の間」が微かに透けて見える
2 「半外の間」から「半内の間」を望む。北側のクスノキへ視線が抜けていく
3 「半内の間」。「荒々しい素材」を「緻密に施工」することで「自然との合一」により近づけることを試みた

選評

応募資料を見た時から、そこから読み取れる独特の世界観は目を引くものがあった。

設計者は、まずブリコラージュによる造園空間から思考し、次に科学的思考による建築空間を発想することで、揺れやズレの持っている寛容さと高度な科学技術を兼ね備えた、よりよい空間がつくられると言う。

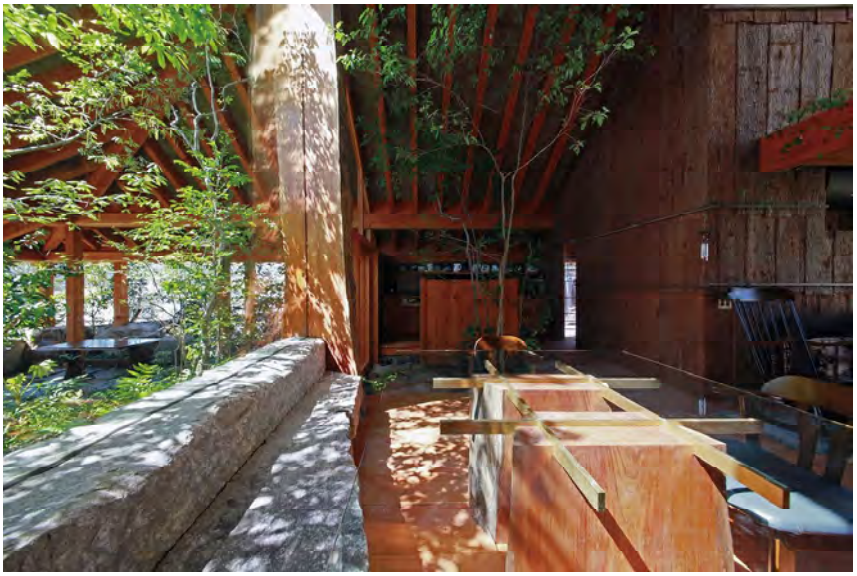
この住宅は、設計者が名付けるところの「外の間」といわれる駐車スペースを含む前庭、「半外の間」といわれる屋根のかかった外部空間、台所と居間からなる「半内の間」、個部屋群の「内の間」で構成され、中庭を中心に「外の間」－「半外の間」－「半内の間」－「内の間」と時計回りにスペース配置する中で、ゆるやかに造園空間から建築空間へ変容していく。特に「外の間」－「半外の間」－「半内の間」の領域は視覚的にも、造園的手法からインテリアへ移行していく造形手法においても領域が曖昧に設えられていて、ここに独特の空間性が表現されている。その空間性に素材選定をオーバーレイしていくことで濃密な世界観が表現される。ここでも設計者は「荒々しさ」と「緻密さ」の揺れ幅の中に、豊かな空間が存在すると言い、実践している。

「荒々しさ」とは、屋根の天然スレート、外壁の杉皮貼り、帯鋸仕上げの米松、そして地元岡崎の花崗岩（宇寿石）など、一見して現代

4 中庭を中心に「外の間」「半外の間」「半内の間」が緩やかにつながる
5 「半外の間」と「半内の間」をつなぐ玄関
6 造園と建築を緩やかにつなぐ「石のベンチ」と「大黒柱」のディテール

4

5


6

1階平面図

の産業化された建築仕上材とは異なる「荒々しい」素材の扱いと配置から表現されるものであり、「緻密さ」とは素材配置のバランス、異部材取り合いのディテールにあり、それを実現した卓越した施工技術と設計者の執着も見逃せない。

「半外の間」は、採石場に放置された、形、大きさの著しく異なる花崗岩を腰壁として置き、その上に屋根を支える柱を石場立てし屋根の横架材の水平を保っている。また「半外の間」と「半内の間」の境界には、樹形そのままに欅を縦割りした大黒柱と花崗岩のベンチが置かれているが、双方に溝を掘りサッシュレスで大判の透明ガラスを嵌め込み、「半外の間」－「半内の間」の境界としている。このガラス面をこえて「内の間」の外壁の杉皮貼りが「半外の間」から「半内の間」に貫通する様は双方の領域境界の透明感を強調している。

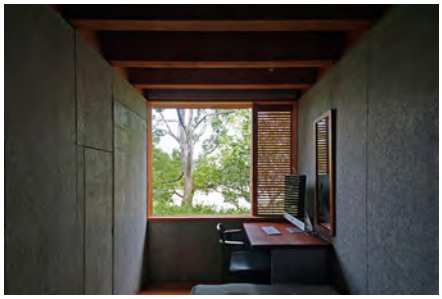
この住宅は設計者の自宅であり、一般的住宅街の中で設計者の建築観を具現した小宇宙としてできあがっている。その小宇宙の中心であり広くとった「半外の間」が、個部屋である「内の間」の大きさを圧迫していると見えなくもないが、それを差し引いても創出された空間の質と感性の表現は圧倒的であり、ここに大賞を贈るものである。

（菅 順二）

7

ロフト平面図

8



9

2階平面図

10

7 「半内の間」の「優しい木漏れ日」と「柔らかな翳」
8 「内の間1」。右に中庭
9 「内の間2」からクスノキを望む
10 「半内の間」と「内の間3」の関係性。ロフトの高い窓から重力換気にて排熱する